

わ ふるさとを生きし清流と緑と笑顔が輝くまち

広報わたらい

2019
11
Vol.652



特集

挑む、担う、守る、繋ぐ— 農業を未来へ

ECO DEPT.

令和元年 11月号 もくじ

- 度会町職員追加募集..... 17
- 3町合同婚活イベントを開催... 18
- 空き家バンクを創設します... 19
- 秋の全国火災予防運動..... 20



挑む、担う、守る、繋ぐ—— 農業を未来へ

特集目次

第1章	夫婦で挑む、 日本一の米	4
第2章	地域の水田を担う、 家族の絆	6
第3章	自分たちの手で守る、 農地と伝統	8
第4章	子どもたちに繋ぐ、 農と食	10

古くから、令和を迎えた今日に至るまで、農業は町の基幹産業です。かつての度会町の人々は、川岸の台地に住み、耕地を開いてきました。山がちで平地が少ないという地形的条件から、耕地面積の拡大は難しくかつたものの、度会の山々から宮川に注ぐ豊かで清らかな水は稲作に適し、度会のお米はおいしいと高い評価を得ています。米以外にも、茶を中心に、野菜や果実など、さまざまな作物を育て、生活の糧としてきました。

今、町の農業は、従事者の高齢化、産品の市場価格低迷、農業用機械などのコストの高騰といった課題に直面しており、厳しい環境の中、農家の数は減少の一途をたどっています。

「このまま、町の農業は衰退していく一方なのでしょうか？」

近年、町内では、若者の就業が目立つようになり、農業を出発点とした地域活動により地域が元気になったりと、今後が楽しみなニュースが多く出ています。

何よりも、町で古くから続く、子どもたちと農業のふれあいでは、明るい笑顔が絶えることなく続いています。

今月の特集では、町の農業の最前線に立つ皆さんを中心にスポットを当て、農業にかける思いを取材しました。

町の農業を未来に繋ぐため、汗を流す農家の皆さんとともに、農業のあり方について一緒に考えていきたいと思います。





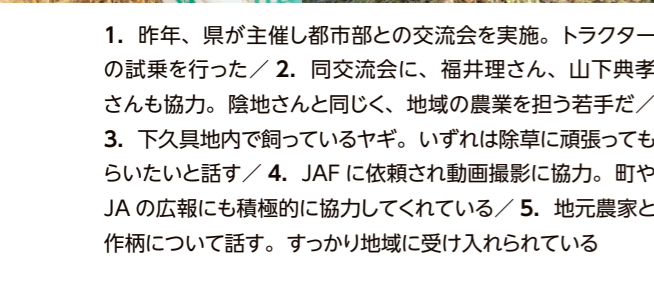
1



2



3



4



第1章

夫婦で挑む、 日本一の米



夫婦で協力しながら 米作り

朝4時、上久具で収穫間近の水田を見回るのは陰地伸哉さん。妻の盛希さんと、町内の約7.3haの水田で、ミルキークイーンを作っています。「インシシヤシカが獣害防止柵の中に入っていないか、柵が破損していないかこまめにチェックが必要です」と話す伸哉さん。田植えから稲刈りまで、草刈り、獣害対策、追肥や害虫防除と、忙しい毎日が続きます。

盛希さんは、農作業を手伝いながら、販売の作業に。「稲もともと、伸哉さんは熊野、盛希さんは山梨と2人とも町外出身。「四日市で就職しま

縁あって度会町で

したが、熊野に帰って農業をやるうと思つて、勉強のために農業法人を探し、類農園度会農場に配属されたのがきっかけ」と振り返る伸哉さん。盛希さんと職場で出会って結婚し、独立を考えたとき、縁もできた度会町でやっていたことと決めました。「独立にあたっては、認定新規就農制度は助かりました」と語る2人。新規に就農した人が、農業経営が確立するまで国の支援を受けられるようになる制度です。「これから農業を始めたいという人のためにもぜひ周知してください」と話してくれました。



誰にも負けないという気概

通販などで、直接お客さんを相手に販売を行う2人。「絶対においしいお米です、と自信を持って売りたい。お客さんの喜ぶ顔を見たいという気持ちは日本一です」と話す盛希さん。お客さんの声がダイレクトに聞けて、米作りに反映できるスタイルにこだわります。「先を行く生産方法や販売方法を見て、負けるもんか!という気持ちで成長しています。技術的にはまだまだ未熟ですが、米を作るのなら誰にも負けないという気概を持って、仕事に取り組んでいます」と語る2人は、だからこそ「おいしかったよ」の声とともにまた買ってくれるのが一層嬉しくなると言います。

直近の目標は、現在自宅横に設置しようとしている加工場の稼働。和菓子を受注生産したり、販売所に卸したりしていく計画です。

「乾燥は委託しているのですが、将来的には自分の設備が欲しいですし、店舗もいずれば持ちたい。やりたいことはたくさんあります」と話す2人。そのチャレンジ精神で、さらにおいしいお米をお客さんに届けていきます。

1. 昨年、県が主催し都市部との交流会を実施。トラクターの試乗を行った／2. 同交流会に、福井理さん、山下典孝さんも協力。陰地さんと同じく、地域の農業を担う若手だ／3. 下久具地内で飼っているヤギ。いずれは除草に頑張ってもらいたいと話す／4. JAFに依頼され動画撮影に協力。町やJAの広報にも積極的に協力してくれている／5. 地元農家と作柄について話す。すっかり地域に受け入れられている

5



今年の稲刈りは大変

午前中、天気予報を見て渋い顔をする飯田林業の社長、飯田隆治さん。平成29年から、会社で米作りを行っています。

8月、稲刈りを直前に控えた町内の水田に、台風10号に伴う風雨が押し寄せ、多くの稲穂が倒れました。その後も天候はすつきりせず、町内の農家の多くは、倒れた状態での稲刈りを余儀なくされました。「雨が降ったらしばらく刈れん。天気ばかりはどうかにもできんからなあ」と隆治さん。取材に訪れた8月20日、稲穂から露が落ちたのを見計らって、息子の卓也さん、雄亮さん、峻亮さん、従業員と一緒に稲刈りに向かいました。

倒れた状態での稲は、濡れると露が落ちにくく、ある程度湿った状態となるため、とても詰まりやすくなります。この日の稲刈りも、詰まったコンバインを掃除し、また刈るといふ流れのため、スムーズに進みません。

途中、詰まった箇所が分からなくなり、親子でマニュアルを見ながらコンバインを調べているところに再び雨が。この日の稲刈りは中止となりました。

ました。

今年の稲刈りは、例年よりかなり遅い9月中旬までかかり、「大変だったなあ」と振り返ります。「自然が相手だから、どつにもならん。トラブルは起こって当然で、その後が大事」と語ってくれました。

地域の担い手として

もともと、隆治さんは自家消費の米を作っていますが、飯田林業として米を作り始めたのは平成29年か

ら。設備を整え、田間を中心に約5.5haの水田で耕作しています。

「全部、会社や父の付き合いから頼まれて作るようになった場所ばかり」と話す雄亮さん。町の農業委員も務め、農地の荒廃には敏感です。

「企業ですから、採算が取れるようにしていくのは当然ですが、地域の担い手として、地域の農地が荒れないよう頑張っていきます」と話してくれました。

家族で取り組む米作り

高校を出て、工場で3年ほど勤めてから、飯田林業で仕事を始めた雄亮さん。

「もともと山は好きでしたから、閉め切った空気の悪い

1. 乾燥の様子を確認する雄亮さん／
2. 8月20日の稲刈りの様子。ほぼ真横に稲穂が倒れている中での作業
3. 農業雑誌を読む隆治さんと雄亮さん。情報の収集にも余念がない
4. コンバインの掃除
5. 倉庫にお手伝いに来た雄亮さんの息子、暖飛くん。米袋にスタンプを押す係だ



工場での後もずっと勤めるよりは」と転職を決めたそうです。「弟の峻亮の方が先に入社していて、兄はその後。順番が逆転してますね」と笑います。米作りを始めるにあたって、「林業一本でやっていくのは厳しい。また、林内の作業は農業以上に天候に左右されるから、空き時間でできる仕事が良い」と家族で相談して決めました。

「家族皆、性格がバラバラなので、それに合った仕事の割り振りが自然とできています。思ったことをぶつけあえるから、ケンカもあるけど、よりよい考えが生

まれると思います」

「おいしい」の声が結果に

「売れ行きは上々。特に、□□ミで増えていってるな」と嬉しそうに隆治さん。関西方面の飲食業者に販売し、そこから広がっているそうです。

「このあたりで有名な『伊賀米』よりもおいしかった、と言われたときは嬉しかったです。そういう声で、個人への販売が増えているから、もっと頑張らな」と、おいしい米作りに意欲を見せま



第2章

地域の水田を担う、家族の絆

飯田 雄亮さん



自分たちの手で守る、 農地と伝統

人気イベント 立岡で

毎年6月、町内の子どもたちが楽しみにしているイベントがあります。立岡営農クラブの畑で行われる、親子ジャガイモ収穫体験です。

農作業を通し、親子の絆を深めるため、町青少年育成町民会議が開催するこのイベントは、立岡の皆さんが精魂込めて作ったジャガイモを試食・持ち帰ることができ、受け付け開始からすぐに定員に達してしまう人気行事です。

「遊休農地を活用した取り組みで、たくさんの人に喜んでいただけるのは嬉しい」と話す、立岡営農クラブ代表の山本操さん。笑顔でジャガイモを掘る子どもたちを見ると、やってきて良かったと感じます。

農業を楽しんでやろう

立岡営農クラブが開始したのは平成22年のこと。有志が集まって、当時から課題となっていた遊休農地について話し合い、「生まれ育ったこの土地を荒らしたくない。どうせなら、遊休地を利用して、農業を楽しんでやろう」と立ち上げ、翌年から活動を開始しました。

現在耕作しているのは、立岡の遊休農地約78a。前述のジャガイモに加え、ナバナ、もち・うるち米、カボチャ、サツマイモなど、さまざまな種類の作物を作っています。農協に販売するほか、イベント

トでの販売、給食への活用など、地産地消にも協力しています。

ジャガイモ収穫体験以外にも、田植え体験や虫送り、餅つきなどを行い、地域を元気にしています。

- 1. 側溝に枘を入れる作業
- 2. 側溝清掃の様子
- 3. 水路の補修
- 4. 遊休地で田植え体験
- 5. 虫送りの行列



農地を守るために

平成25年からは、立岡区では多面的機能支払交付金事業にも取り組んでいます。農村の保全のための国の事業で、農地・水路の管理や地区の環境保護を行います。

「田が少ない人は、機械が壊れるとそれを契機に作るのをやめてしまう。放っておくわけにはいかない」と山本さんは危機感を募らせます。

「色んなイベントに参加してもらったり、メディアに取り上げてもらうと、地区のみんなで協力してやっ



ることが認められているのは嬉しい。とても楽しいことだと思っので、長く続けるためにも、60歳代の人にもっと加わってもらい、一緒に農地を守っていききたい」と話してくれました。





第4章

子どもたちにもたち繋ぐ、

農と食

1. 今年の稲刈りの様子 / 2. 手植えする小学生 / 3. 長原保育所園児たちのエンドウ収穫。指導するのは地元長原の皆さん / 4. 市場の長谷川元之さんの協力による、サツマイモの収穫体験。中之郷保育所園児たちが参加 / 5. 棚橋保育所で、一緒に収穫したサツマイモを味わう山本充祇さん / 6. 泥だらけの作業に、子どもたちは満面の笑顔 / 7. 南伊勢高校生と度会小学校児童による茶摘み体験

未来に受け継ぐ

米作りやいも掘りなど、取り組みを始めて20年以上がたちます。どうしたら子どもたちに興味を持ってもらえるのか試行錯誤しながら続けてきました。今では最初の頃の子どもたちが親となり、「うちの子が今度行くのでよろしく」と会うとあいさつしてくれ、とても感慨深いです。

年齢的な限界もありますので、後継者に受け継いでほしいという気持ちはあります。大人から子どもに農業を教える場として続けていけるよう、ぜひ活動に加わってほしいと思います。

山本 充祇さん



次の世代に繋ぐために
 町内の子どもたちを対象とした農業体験は、他にも多数実施されています。保育所園児のエンドウ、サツマイモの収穫体験、小学校児童のブルーベリー収穫体験、小・中・高の茶摘み体験など、大勢の農家の協力により幅広く行われています。食や農の大切さを学ぶとともに、世代間交流の場でもあり、地域の農家の皆さんから、農業についての考え方や思いを学びます。「農業の魅力ややりがいは、

実際に体験しないとなかなか感じられない。体験した子どもたちが農業をしてくれるとは限らないけれど、作物を育てる喜びを知ることが、その第一歩だと思う。私たちが受け継いできた農地を、次の世代に繋いでいくために頑張っていきたい」と、農家の皆さんは話してくれました。農業を取り巻く課題は一朝一夕では解決できず、険しい道のりですが、子どもたちの笑顔に、希望の光が見えました。

昔ながらの米作り体験

9月初頭、恒例の行事となった小学生の稲刈りが今年も開催されました。田植えから収穫までを体験し、総合的に学ぶこの取り組みは、17年前から続いています。協力してくれているのは、山本充祇さんをはじめとする棚橋地区の農家の皆さん。子どもたちに農業と食の大変さ

と大切さを五感で感じてもらいたいと、昔ながらの手植え・手刈りの体験にこだわります。子どもたちも、汗だく、泥だらけになって、農作業を楽しんで行きます。「面白かった!」「食べるのが楽しみ」と、毎年喜んでくれるのが何より嬉しいと山本さんは話してくれました。

